

## ●神と村人と牛馬一体

毎年七月七日、西郷村は多くの人でにぎわう。田代神社に平安時代から伝承されている御田植祭の日である。この祭りを「御田祭」という。全国でも珍しい農耕行事で、県指定無形民俗文化財となっている。

村の中心にある田代神社の前に「上の宮田」「中の宮田」「下の宮田」と呼ばれる水田がある。祭りは昔から世襲で受け継いだ家が祭事役を務め、これに氏子が加わる。近くの上田野(うえんの)神社からご神体を迎え、上の宮田から中の宮田へとご神幸があつて始まる。

若者が担ぐみこしが泥田の中を練り歩き、同じく若者の乗った裸馬が、田の中に入って駆け回り、泥のしぶきを辺り一面にはね飛ばす。祭りに集まった人々は馬が駆け回つてくるたびに、後ずさりして歓声を上げる。泥のしぶきは御利益とされる。



全国でも珍しい農耕行事。馬が駆け回り、牛が田をならす

牛も田に入って代かきをし、田をならしていく。その後、鉦(かね)や太鼓に合わせて、催馬楽(さいばら)という古い歌謡が歌われ、早乙女の田植えが始まる。

神様と村人と牛馬が一体になった祭り、見物に訪れた人たちは早苗と護符を持ち帰って家に祭る。

田代は西郷村の中心集落で、名前の通り水田の適地に付けられている地名である。村が開かれた当初からある地名であろう。村を囲むように連なる尖山(七一六<sup>トイ</sup>)と日陰山(八九八<sup>トイ</sup>)は、登山でも親しまれている。日向市から車で約三十分、耳川の美しい眺めを見ながら、国道327号から村に入ると、平和な風景が展開する。尖山の北側のふもとに、観音滝がある。七十<sup>トイ</sup>の高さから清流が落下する。滝の周りに遊歩道があり、三十三体の観音石像が祭られている。

江戸時代末期の安政五年から六年(一八五八―五九)につくられたものである。

仏像の中で最も優しい姿をしている観音は、三十三身に姿を変えて衆生(しゅじょう)を救うとされ、古くから信仰された。田代の人の信心深さを今に伝えている。

西郷村を代表する明治生まれの歌人・小野葉桜は西郷村を「父上の子の百姓にかへらなむ垂り穂の秋のこのふるさと」と詠んだ。稲の実り、緑濃い山と清流、御田祭を大事に受け継ぐ信心深い村人たち…。葉桜の歌にも込められているように、西郷村は現代人にふるさと本来の姿をなつかしく呼び戻してくれる魅力を内在している。

甲斐亮典